

令和元年6月2日現在

機関番号：14501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13165

研究課題名(和文)イラン音楽における身体性の研究～各楽器固有の身体感覚・語法、その交差～

研究課題名(英文)Study on physicality in Iranian music

研究代表者

谷 正人(TANI, Masato)

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：20449622

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：イラン音楽における身体性については、特にウード(発展的にはセタール・タール)という楽器の身体性をサントゥールのそれと比較する観点から論文「指で感じ理解すること―楽器間で異なる身体感覚の研究にむけて」として発表した。
また同一楽器内での身体性の差異という観点から、サントゥール演奏を従来型の身体性と、新しい身体性とに大きく分けて論じた「サントゥール演奏の新しい身体性―「楽器盤面の地政学」へ向けて」論文を発表し、また音楽家の身体理解の観点から有益なアレクサンダーテクニークについては「ミュージッキングとアレクサンダー・テクニークとの共振：私たちが諸民族の音楽から学ぶもの」論文を発表予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、音楽学の分野においては未だ確立していない、身体経験を記述する適切な語彙や文体の確立・開発へと繋がるという意義を有している。そのことによって今後音楽研究は、音楽実践の現場をより直接的な研究対象とすることができる段階へとステップアップすることが予想される。また、中東の伝統楽器ウードの指使いを元として構築されたとされるアラブ古典音楽の音階理論の解明へとも繋がる。同じような旋律を弾いていながら実はそれぞれの奏者の音楽認識が大きく異なっている―演奏者の間で「感じ」られているこうした「楽器間の差異」は未だ言語化されておらず、その意味において本研究の意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：With regard to physicality in Iranian music, especially in the context of comparing the physicality of an instrument called Oud (developing Setar-Thar) with that of Santur, "Sensing and understanding from fingers ; Toward comparative studies of different physical senses among various instrument players" has been published. In addition, from the viewpoint of differences in physicality within the same instrument, I published "New physicality of santur performance" in which Santur performance is divided into conventional physicality and new physicality and also presented the "The Resonance between Musicking and Alexander Technique" which is useful to understand the musician's physicality.

研究分野：民族音楽学

キーワード：民族音楽学 イラン音楽 身体性

1. 研究開始当初の背景

我々はしばしば、音楽家を紹介するのに「専門は近代フランス音楽」「専門はインド音楽」などという表現を用いる。しかし一口に「～音楽を専門としている」といっても、その中身は一樣ではない。なぜなら人が音楽を抽象的に想像しようとする場合でさえ、音そのものだけを他の要素から切り離して思索しているとは限らないからである。例えばピアノにたしなみがあるものは無意識に、ピアノ構造やそれを弾く身体の限界(やメリット)のなかで音楽を扱うだろうし、歌によりたしなみのあるものは、声域という制約のなかで、しかし「声の肌理」のようなメリットを無意識のうちに享受しながら音楽をつくるだろう。結果として、人は音そのものだけを扱っているようでありながら、そのアウトプットには、専門とする楽器実技の経験など個々人によって異なる具体的・身体的な現象の影響が色濃く残っているということになる。

このような観点から近年音楽学の分野においても、身体性をめぐる問題群が議論の俎上に載せられるようになった。例えば2003年出版の『ピアノを弾く身体』はその分野において示唆に富む論考を多く含む優れた研究の一つである。論者のひとり大久保賢は「手のドラマ ショパン作品を弾いて体験する」と題した論文で、ショパン作品の特徴を「スリリングな左手」「伸縮する手」「鍵盤にまとわりつく手」といった観点から分析し、楽譜や鳴り響きのみの音楽ではない「演奏することによって感得された音楽のありよう(=生の体験)」(大久保2003:165)を記述することで、従来の楽曲分析ではすくい取ることができない部分に光をあてることに成功した。

しかしその後、演奏者と研究者とが分業する傾向がある西洋音楽の分野では身体論に関する目立った進展はみられていない。その一方で、研究者が演奏者でもある場合が多い民族音楽学の分野においては、その知見を活かしてこの身体性の問題を考え、音楽研究の新しい方向性を切り開く可能性が十分に残されている。そこで民族音楽学およびイラン音楽研究を専門としている研究代表者が、後述する方法論を用いてこの課題に取り組んだ。

2. 研究の目的

研究期間内においては、イランの様々な音楽家・演奏家たちを対象としてレッスンへの参与観察を行い、彼ら/彼女たちがどのように音楽を把握・理解しているのかを、楽器ごとに異なる身体性という観点から具体的に明らかにした。そもそも音楽家たちの中では、各楽器の持つ身体性別の言い方をすれば、楽器そのものが楽器奏者に対して働きかけるアフォーダンス性

が、生み出される音楽のフレージングなどに影響を与えていることは自明である。また作曲家も、様々な楽器から構成される合奏曲のオーケストレーションの問題を考える際に、身体性を含むこうした楽器ごとの特性を無意識であれ考慮している。従って、作品分析やインタビュー調査も併用しつつ、音楽家たちの実践に影響を与えている様々な身体感覚について多角的に明らかにした。

3. 研究の方法

本研究は、多種多様な楽器を擁するイラン伝統音楽を対象に、専門楽器を異にする様々な演奏家たちが、イラン音楽という共通の土台を経験しつつも、どのように互いに異なった身体感覚を持ちながら音楽を営んでいるのかを考察するものであった。この目的に照らし合わせ、本研究では、イランにおいて以下の複数の声楽や楽器に対し、研究代表者自身がレッスンを受けるという形での参与観察を行った。また音楽家の身体理解の観点から有益なアレクサンダー・テクニクについても日本とアメリカにおいて参与観察を行った。

4. 研究成果

上記の成果は、特にウード(発展的にはセタール・タール)という楽器の身体性をサントゥールのそれと比較する観点から「指で感じ理解すること 楽器間で異なる身体感覚の研究にむけて」『イラン研究, 13』, 136-149として結実した。

また研究代表者はサントゥールという楽器については経験が長いので、同一楽器内での身体性の差異という観点からサントゥール演奏の身体性の考察を行った。具体的には「同じフレーズが如何にサントゥール奏者ごとに異なったばち使いで演奏されているのか」「ばちの握りかた、手首の角度、姿勢の違いがフレーズにどのような影響を与えているのか」「同じフレーズであっても、各奏者がサントゥール盤面上のどの場所を打弦しているのか、それによって音色などにどのような影響があるのか」といったテーマで考察を行い、サントゥール演奏を従来型の身体性と、新しい身体性と大きく分けて論じた「サントゥール演奏の新しい身体性 「楽器盤面の地政学」へ向けて」西尾哲夫/水野信男編『中東世界の音楽文化 うまれかわる伝統』, 98

- 115 として成果を発表した。また音楽家の身体理解の観点から有益なアレクサンダー・テクニクについては「ミュージッキングとアレクサンダー・テクニクとの共振：私たちが諸民族の音楽から学ぶもの」という論文をナカニシヤ出版から『音楽文化とまなび』所収論文として2019年度中に発表予定である（原稿は提出済み）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

1. 打弦楽器をめぐる試行錯誤 インド・イランのサントゥール 季刊 民族学, 116号, 43-50 2018/10 総説・解説(大学・研究所紀要)
2. 伝統文化における学びのプロセス：イランを事例に 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要 11, 2, 75-79 2018/03 研究論文(大学、研究機関紀要)
3. 指で感じ理解すること 楽器間で異なる身体感覚の研究にむけて イラン研究, 13, 136-149 2017/03 研究論文(学術雑誌)
4. サントゥール演奏の新しい身体性 「楽器盤面の地政学」へ向けて 谷 正人 西尾哲夫/水野信男編『中東世界の音楽文化 うまれかわる伝統』, 98 - 115 2016/09 研究論文
5. 「ミュージッキングとアレクサンダー・テクニクとの共振：私たちが諸民族の音楽から学ぶもの」ナカニシヤ出版『音楽文化とまなび』(予定)

〔学会発表〕(計 10件)

- 1 第35回人文機構シンポジウム「中東と日本をつなぐ音の道(サウンドロード) 音楽から地球社会の共生を考える」パネリスト 第35回人文機構シンポジウム「中東と日本をつなぐ音の道(サウンドロード) 音楽から地球社会の共生を考える」 2019/03
- 2 イラン音楽における記譜と創造的解釈、面状に配置された弦と対峙する身体 シンポジウム「糸が紡ぐ音の世界」 2019/02
- 3 サントゥールやイラン伝統音楽に関する講演 神戸大学准教授サントゥール演奏・講演会 2018/09
- 4 「民族音楽」からペルシャ文化を知る 神戸映画サークル評議会 2018/07
- 5 「第三部：イラン音楽・芸術」セクションにおける、イラン音楽の実演(サントゥール)と解説「イラン文化との交流の歩みーイラン・イスラーム革命 40周年記念シンポジウム」 2018/06
- 6 小泉文夫とペルシア音楽 民音音楽博物館文化講演会 2018/03
- 7 打弦楽器の調律機構および奏法をめぐる考察 インドとイランのサントゥールを例に 2017年度南アジア研究国立民族学博物館拠点「音楽・芸能班」第1回研究会 2017/10
- 8 イランのサントゥールとインドのサントゥール その共通性と相違性 関西イラン研究会第49回研究会 2017/06
- 9 指から音楽を理解すること サントゥールとセタールの比較から 研究プロジェクト「音楽する身体間の相互作用を捉える ミュージッキングの学際的研究(代表者 野澤豊一)」 2017/04
- 10 指で感じ理解すること 楽器ごとに異なる身体感覚・語法の研究 第46回関西イラン研究会 2016/05

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。